

(司会) どうもありがとうございました。それでは、ただ今から少々時間をいただきまして、何かご質問をなさりたい方がいらっしゃったら、お手を上げていただけますか。

岡本さんはこの後、今日一日私どもとお付き合いいただきますので、後でお昼休みにでも個別にお話を伺っていただいても結構ですが、どなたかいらっしゃいませんか。

(竹内) 本当は私がしてはいけないのかも知れませんが皆さん静かにしていられるので、最初に口火を切らせていただきます。千葉大学の竹内と申します。先ほどAPI公開の話があって大変魅力的な話に聞こえるのですが、大学図書館の蔵書をどういうものとするかということが、実はその背景にはあるはずなのです。大学図書館の蔵書はいわゆる公共財としてとらえられるものなのか、それともやはりその授業料というものがベースにあって、それに成り立っているものだからクラブ財ととらえるのだという考え方があると思うのですが、岡本さんのお考えからすると、これは大学図書館の蔵書も公共図書館の蔵書も全く同じで公共財としてとらえるべきだというお考えでよろしいでしょうか。

(岡本) そうですね。やはり日本の大学の場合、私立大学も含めて、基本的にほぼ税金がないとやっていけない体制になっている限りは、やはり大学図書館の蔵書に限りませんが、基本的に大学の資産は国民の資産として考えるのが基本であろうと私自身は思っています。ただ、私としては、「それは市民のものだ、よこせ」というスタンスというよりは、大学が自ら積極的にこれだけの資産があるということを公開し、大学はいかにコストがかかるものなのかをきちんとアピールしていくべきではないかと思えます。それだけの資産の価値を秘匿するよりは、公開することによって積極的にアピールするということですね。情報公開することにはある意味弱さを見せることになるかもしれませんが、弱さを見せることによってこそ強さを発揮できるのではないかと考えている次第です。

(司会) ほかにいらっしゃいませんか。では、先ほどせっかくベストだご紹介いただきました、都留文科大学の小林さんはいらっしゃいますか。どのような工夫やどのようなコミュニケーションに配慮されたかを、一言参加の皆さんにお願いします。

(小林) 都留文科大学附属図書館の小林です。まずここに映していただいたことに感謝しております。ありがとうございます。この大学と市立図書館の連携の協議会がありまして、メン

バーは館長、大学の方では附属図書館運営委員の協議委員のメンバー。当然市立図書館の方では市役所の課長が入り、生涯学習などのそういう会合を基に3年ぐらい前かもう少し前か、発足がありまして、このようなことが必要であろうというところが出発点です。詳しいことに関しては、私も動揺しておりますので（笑）。何かの形で回答できたらと思っておりますが。

（司会） いきなりですみません。ありがとうございました。何か追加してお聞きになりたいことがあれば、よろしいですか。

（岡本） ぜひご発表いただければと思います。もう少しだけ補足しておきます。皆さんも見るときにそこを注意していただければと思いますが、各大学の図書館を見たとき学外の利用者に対してどのように誘導しているかというのは一つのポイントです。これはウェブサイトづくりの各論になりますが、最近、メニューのところに「学外の方へ」と書いている図書館が非常に多くなりました。数年前はそのような大学図書館は少なかったので、意識の変化を感じます。しかし、いくら「学外の方へ」と書いても、メニューはそれほど利用者の目に入りません。さて、都留文科大学附属図書館の場合ですが、トップページにかなり分かりやすく一般開放について記述されています。利用者に最初に見せたいメッセージは、メニューとして複数の項目の中から選択させるのではなく、都留文科大学のように、トップページに来た時点で都留市の市民にこのようなサービスを提供しますというメッセージを伝えるべきでしょう。さらに各論になりますが、トップページのメニューから利用案内と書いてあるリンクを押すと、学内者向け利用案内、学外者向け利用案内と分かれているのがいいのか、あるいはトップページにあらかじめ学外者と書いてあるほうがいいのか、あるいはそもそも学外者と書くことがいいのか、学外者という言葉遣いが利用者に疎外感を与える可能性を考えて、「お住まいの方々へ」なのか、「市民の方々へ」なのか、といった点をぜひそれぞれの図書館で振り返っていただけると良いかと思います。そのとき都留文科大学の例を参照しながら見ていただくと良いでしょう。

（フロア1） 3 - 1で、大学図書館と公共図書館は同じ方向を見ていないのではないかというご指摘がありましたよね。私は見なくて当たり前だと思っているのですが、これはそういう意味ではないのですか。本質的には違うものだと思います。

（岡本） 役割が。

(フロア1) 役割が。

(岡本) それは全くそのとおりで良いのではないかと思います。大学図書館と公共図書館の基本的な役割は全く異なりますから。ただ、おそらく問題は、大学図書館が地域内連携を進めて、要するに学生、教員に対しての教育研究図書館としてだけでなく、地域市民に対して開放していくことが、その大学図書館にとって重要なミッションであると定義している場合です。そうであるにもかかわらず、ズレというものが発生していたら問題でしょう。その大学図書館がそういう考えを持っているにもかかわらず、公共図書館と同じ方向を見られていないのであったとしたら、それは非常に問題ではないかというニュアンスでとらえていただければと思います。

(フロア1) ですから、ちょっと表現は悪いのですが、ミッションが二次的というかセカンダリーであって、プライマリーではないと私は思っていますので、そういう余裕というか、そういうことも必要ではあるけれども、研究教育が第一義的にあるべきだという意味で同じ方向を向く必要はないだろうと思っています。

(司会) この辺は議論が非常にあるということと、それぞれの主体的な考え方をどこに置かということのご意見だと思います。ほかによろしいでしょうか。

(米井) 愛知県立大学の米井といいます。差し支えなければ、ベスト国立大学図書館サイトとベスト私立図書館サイトを教えてもらえればと思います。

(岡本) 最近全部見ているわけではないので、過去の記憶に基づいて思いつく限りでお答えします。私立大学では、専門図書館の部類にも入りますが、法政大学の大原社会問題研究所は、運営体制を含めて非常によくできています。研究所全体の教員数・職員数が、小規模であることを思うと、非常に素晴らしいと思っています。国立大学に関していえば、それほど際立った大学図書館サイトはないという印象を持っています。ただ、逆に言うと九州大学附属図書館に期待しています。最近、雑誌やイベントで積極的に発言されている片岡眞さんをはじめ九州大学附属図書館には非常に優秀なスタッフが揃っているという印象を受けています。そのような

図書館員がいるという点で、九州大学附属図書館はこれから伸びてくる可能性があるのではないかと考えています。また、最近では総合的な評価ではなく OPAC の使い勝手という点においてですが、神奈川大学附属図書館に感心しました。神奈川大学附属図書館のサイトはどのページを見ても、必ず OPAC の検索窓が表示されるようになっています。これも考え次第だとは思いますが、大学図書館サイトにとって OPAC が非常に重要だと考えるならば、神奈川大学附属図書館は非常にいいサイトづくりをしているといえます。ただ、まだ決定的な大学図書館ベストサイトはないだけに、画期的な取り組みをする大学図書館に出てきてほしいと願っています。